

ウワサの保護者会！

今回のテーマは、「子どものケンカ そのとき親は？」



【今回のホゴシャーズ】

デメキン	(母)：長女・大1/長男・中1
シャム	(母)：長女・小5/次女・小2/長男・1歳/次男・0歳
セントポーリア	(母)：長男・小2//長女・年中
エトピリカ	(母)：長女・大1/長男・高1
ビオラ	(母)：長女・小4/次女・小1/長男・年少
マリモ	(母)：長男・小5/次男・小1

高山：さあ、尾木ママ。今回は、子どものケンカ。

その時、親はどうすればいいのか？

尾木：ほら、昔から「子どものケンカに親は口出すな」って言われていたの。

皆さん、知っています？

エトピリカ：知っています。

尾木：うん。このごろ、みんな口を出すね(笑)

(一同笑)

尾木：ただね、その気持ちもわかるわよね。放っておいて、ケガでもされたら責任問われるし。やっぱり、今、手加減を知らない子が多いじゃない。心配だから見るっていうのも、すごくわかる。これ、1つの難題だわ。

高山：こんな意見を、テレビの前の皆さんからいただいています。

「最近の子どものケンカは、手加減をせずに殴ったり、暴言がとにかくひどい。度が過ぎます。親が知らないというレベルでは済まない状況になっています」

ちゃんと、把握をしておきたいし、子どもたちに任せておけないという思いを持っていらっしゃる保護者が、結構いらっしゃるみたいなんですわ。

ビオラ：(小学)1、2年生のころって、お友だちと集団で下校してくるんですけど、うちの子も、泣かされて帰ってきたことが何回かあって。必ずクラスに“女子のボス”みたいなのがいて、今日のターゲットはうちの子だ、次の日はあの子だっていうような感じで。

デメキン：怖い、怖い。

シャム：次女の話なんですけど。体育の授業で、男の子がマットを片づけなかったんですね。うちの子と女の子どうしみんな、気を利かせて片づけたら、急に「片づけるな！」って怒りだして。うちの子の足を蹴ったんです。そしたら、青あざがでちゃって。



高山：シャムさんのお子さんは、活発なんですか？

シャム：そうなんです。次女がすごくヤンチャで。女の子なんですけど、男の子みたい。

尾木：ああ、なるほど。男の子、ムカつくのよね、そういう子(笑)

高山：セントポーリアさんも、子どものケンカで悩みを持っていらっしゃる。

セントポーリア：そうですね。子どもの遊びとか、子どものケンカに、どこまで親が介入していったらいいのかなっていうのを、すごく悩んだり迷ったりしています。

高山：なるほど。どこまで介入、踏み込むべきか、ということで、実際にどんな場面があるのかという映像をご用意しましたので、セントポーリアさんのお悩みに向き合ってみたいと思います。

セントポーリアさんの息子・たいようくんは、明るくて、友だちがいっぱい。  
この日も10人の友だちが家に遊びに来た。



実はセントポーリアさん、その友だちのことで悩んでいるという。

セントポーリア：すごく友だちどうし仲もよいのですが、時折思いがけず友だちどうしがケンカする場面があって、その時にどう対応したらいいのかなというのを迷いますし悩みますね。

外で遊ばない日は、みんなでゲーム。  
順番に回して遊ぶのが、子どもたちのルールだ。  
でも、しばらくすると、ゲームの回数でもめ始めた。

Aくん：まだ、1回しかやってない。  
Bくん：2回やったよ。  
Aくん：まだ、1回しかやってないよ！  
Bくん：2回目じゃん！

セントポーリアさんは、子どもたちの様子を見に行くことに・・・

セントポーリア：ちょっと怪しげな気配がしているので、気になってしょうがない。

子どもたちのもめ合いは徐々にエスカレート。  
しまいには、ひじ打ちが出た！

セントポーリア：どうした？どうした？

こんなケンカが、たびたび起こるのだという。

Cくん：2回連続ずるい！  
Dくん：だって、オレのだもん、コレ！  
セントポーリア：大丈夫？



セントポーリア：(もめている) 声が聞こえると気になりますね。あんまり気にしすぎても、どうかなども思うけど、極力ケンカになる前に止めたって思うので。

実は以前、家で子どもたちがもめ始めたとき、気づくのが遅れたため、殴り合いに発展してしまったことがあった。



セントポーリアさんは、ケンカを止められなかったことに、深く責任を感じたのだ。以来、ケンカが起きそうになると、早めに声をかけ、事前に止めるようになったのだという。でも、その一方で、声をかけずに見守るときも。

セントポーリア：あまり出す過ぎてしまってもどうかと思いますし、でも放っておくとケンカになってしまうので、その瀬戸際みたいなものが非常に難しいなっていました。

セントポーリアさんは、「親としての責任があるから介入すべき」という気持ちと、「子どもの自主性を尊重して見守るべき」という2つの気持ちの間で悩んでいるのだ。



子どものケンカ、いったいどうすればいいの？

高山：介入すべきか、見守るべきか。ずっと綱引きを、されているんですね。

セントポーリア：はい。

高山：でも、上手だなとも思いましたけどね。

尾木：そうね。保育園の園長先生みたい(笑)

デメキン：ワーって怒らないし、なんか優しく見ている感じがいいですね。

高山：以前、ケンカがあったっていうのは、壮絶なケンカだったんですか？それが相当、効いているのかなって思いましたけど。

セントポーリア：ケガをする可能性があることに関しては、すごく心配ですし、それから気になるようになりました。

ビオラ：そう、そこですよ。やっぱり、ケガは責任を感じちゃう。

デメキン：ただ、どうでしょう。継続性があるものに関しては、私はちゃんと介入して止めておかないといけないと思いますが。だけど、10人なんてなかなか集まらないじゃないですか。すごく素晴らしい場所で、今、ケンカのしかたを覚える場所がないとしたら、できれば見ていたいなって。

高山：私は積極的に子どものケンカには介入すべきだという方、手を上げていただいていいですか？

どちらかという、でもいいんですけど、介入はすべきだと思う方？

介入すべきだと思う方？・・・(見渡して)・・・お三方ですかね。

逆に、ちょっと一歩引いて、まずは見守ろうという方？

尾木：きれいに分かれた、3対3。



先ほど、「ケンカの仕方を学ばせるためにも見守りたい」と発言したデメキンさんは、迷いながらも「介入すべき」のほうへ。

介入派と見守り派、3人ずつに分かれた。

高山：じゃあ、理由を伺っていきますかね。

マリモさんは、ちゃんと介入して把握しておくことが大事だと。

マリモ：私も、本当にケンカはすごくいいと思っているんだけど、今って(子どもたちが)ケンカに慣れてないから、わかんないんですよ。嫌な思いだけして、別れちゃうってことも多くて…。だから、そこに対して、気持ちを説明してあげるみたいな。「あの子さ、きっとイライラしていたのかな」とか、「あれ、やっぱり、やりすぎだったかもね」とか、「怒れて、よかったじゃん」とか。そういう、気持ちを解説をする形を“介入”と呼んでいるんですよ。

高山：なるほど。解説。

マリモ：解説介入。「ちょっと待って。今のを説明すると…」みたいな。

尾木 : それ、昔は上級生とか、お兄ちゃん、お姉ちゃんがやってくれていた。今は、いないから。

マリモ : そう。おせっかいおばさんなんで(笑) すごくおせっかいしたい。

でも、そんな素直に「うん」という場合ばかりじゃなくて、(子どもは)「でも、ムカツク！」とか言っているんですけど。

高山 : 今度は、まずはちょっと見守ろうというシャムさん。

シャム : 一応、見守っています。これ以上ひどくならないだろうっていうところまでは、私はあまり行かないようにはしています。うちは上が女の子で、女の子って結構仲間外れとか「あんたのここと嫌いよ」みたいな悪口を言うケンカが多いんで。

そういうのを、子どもから相談されたときは、「相手にしないほうがいいよ。そういう子とはつきあわないほうがいい」って、経験を元にアドバイスして、自分で対処するっていう力をつけさせたいと思っているんで。

高山 : 見守る派と、介入しますっていう派の意見、それぞれ聞きましたが、どうですか？

尾木 : どちらが正しいとか、そういう問題じゃなくて、それぞれいいなっていうふうに、僕は聞いていました。「ちょいちょいちょい！」って割り込んでいっての介入っていうのもあるかもわからないけれども、そうじゃなくて、交通整理をしたり。さっきからマリモさんが、解説という言葉をおっしゃっていますが、あまり上手に解説されると、僕の役割がなくなる(笑) そういう解説の役割をして、子どもたちに自分たちを客観視する力を、うんと身につけてもらうわけですよ。こういうのは、すごく大事ですよ。そういうところに親が配慮すれば、トラブルとかケンカがあるたびに、ひと回り、ふた回り、大きく成長していくような。トラブルが成長のきっかけになるわね。

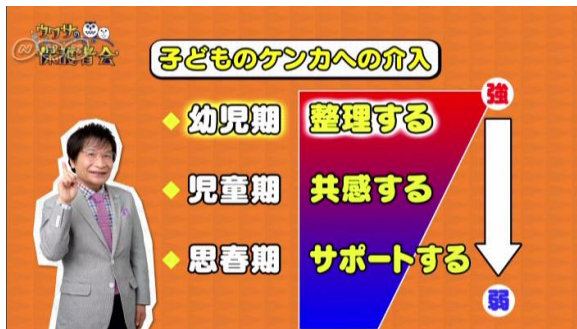


さらに尾木ママ曰く、ケンカへの介入の仕方は、子どもの年齢によって3段階に分けられるという。

幼児期は、状況を整理してあげて、自分の感情を理解させる。

児童期は、共感してあげて、ケンカが起きた理由を一緒に考える。

思春期は、自分たちで解決できるようサポートする。



徐々に介入の度合いを下げていくのがポイントだ。

尾木 : 思春期の子どもたちは、自分たちの仲間内の目っていうのをものすごく気にするわけ。仲間がどう見ているのかとか、クラスで自分は浮いていないのかとか、気にしますから。その集団の力を、逆にうまく育てるといって、トラブルが起きたときに、「君たち、やっぱりおかしいと思うよ」とか言える、リーダー的な子。班長さんでもいいし、部活の部長さんでも何でもいいんですけど、そういうリーダーが、自治的に解決していける能力っていうのを身につけていく。

高山 : 思春期に近づくにつれて、親は直接介入していくべきではない。

尾木 : 介入してはいけないですね。自分たちでできるような仕組みを教えるとか、サポートするってことはありますけれど。

高山 : ここで、また視聴者の方からいただいたお便りをご紹介します。

『中学1年の娘が、ある友だちと性格が合わずに距離を置いていたところ、その両親が「仲間外れにした!」と家にどなり込んできた。しまいには、「娘をいじめたことを認めて、2度としない。今後同じことをすれば法的措置を執ることに同意する」などと書かれた誓約書を持ち出してきてサインを強要された』

デメキン : 親御さんとのトラブルですね。

高山 : 価値観が同じ保護者の方だとつながりやすいんですけど、ちょっと私と合わないとか、大丈夫かなっていう人とも付き合わなきゃいけないシーンというものもあると思うんですけど。

デメキン : 地域でいると、そうですね。

高山 : エトピリカさん、どんなエピソードがありますか？

エトピリカ : 下の息子が小学校5年生の時なんですけど、6年生を送る会の飾りつけを折り紙で作るっていう時間がありまして。班の中で1人だけ折り紙を持ってきている男の子がいて、その男の子の折り紙を班4人で使わせてもらったんですけど、うちの息子がちょっと多めに使ったらしくて。その日の夕方、メールがドンと来まして…。

相手のお母さんから、「折り紙を弁償してください」と。

一同 : えーっ？

エトピリカ：ちなみに、100円の折り紙だったみたいなんですけど、私のほうとしては、じゃあ500円以上の100枚入り的高级折り紙をお返ししますっていうか、倍返し以上で。

マリモ：高级折り紙(笑)

ビオラ：子どもどうして、ケンカしても、そのあと結構あつけらかんとしているんですけど。

エトピリカ：下手に親が入っちゃうから、なんだか、関係がこじれちゃったり、子どもどうしの仲も、ちょっとごちなくなっちゃったりするのかなって思いますね。

高山：今、ビオラさん、ちょっとコメント挟まれましたけど、ご自身は子どもどうしのトラブルから、親どうしのトラブル、摩擦に発展したものを、うまく解決された経験の持ち主。

ビオラ：そういうパターンもあります。

高山：そういうパターンもある？

ビオラ：違うパターンもあります(笑)

高山：どんなふうなトラブルで、どんな解決をしたのか、ご覧いただきたいと思います。

ビオラさんが体験したという、娘に関するあるトラブルとは？

この日、長女かのんちゃんの友だち、さゆきちゃんが親子で遊びに来た。  
2人は同級生でクラスも同じ。お母さんどうしは4年前からの知り合いだ。

でも、こうして仲よくなったのは1年前のこと。  
きっかけは、子どものケンカだったという。



さゆきママ：1年前くらいのことなのに、自分の行動を振り返ると、何でそんなことしたんだろうって。  
ビオラ：いいんじゃない。それがきっかけで、あの時はちょっと言い合いになったけど、結局それでスッキリしたというか。他のママとはできないような、深いところの話や、感情を少し出せるようになったから。

1年前のある日、ちょっとした誤解でさゆきちゃんが、かのんちゃんたちから仲間外れにされた。  
泣いているさゆきちゃんを見たママは怒り、ビオラさんに電話をした。



さゆきママ：なんでうちの子は、仲間に入れてもらえないの！？

すると、ビオラさんも応戦。

ビオラ：子どもの世界に口を挟みすぎなんじゃない！？



さゆきママ：え、そうなの？って感じですね。

(子どもを) この年で、もう離さなきゃいけないのか？みたいな。

ビオラ：そこに温度差があるんでしょうね。私は、まるっきり離す必要はないと思うんだけど、逐一、子どもが泣いているのに親が入って、一回一回解決してあげる年ではないと思いました。

意見は平行線のまま・・・

子どものケンカが親のケンカに発展してしまったのだ。

さゆきママ：次に顔合わせるときは、どんな顔をして合わせようって。

ビオラ：お互い感情的になった手前ね。やっぱり、気まずいなっていうのはありましたよね。

わだかまりを残したまま迎えた翌日・・・

子どもの遠足のお迎えで、2人はバツタリ出会ってしまった。

気まずい空気の中、ビオラさんは思い切ってこんな言葉をかけた。

さゆきママ：「今日よかったら、このお迎えのあと時間あったら…」って言われて。

ビオラ：「うちに来ない？」みたいな。

さゆきママ：「う、うん」って、結構ビックリして…。

ビオラ：やっぱり、言い合いしちゃって、自分も嫌なことも言っちゃったし、そういうわだかまりを持っていたくなかった。この1回のケンカで終わってしまうのは、ちょっと残念だなんていう気持ちがある中であって、私も勇気を持って誘って。でも、そこで「用事があるから」ってならなかったからよかったよね

お酒を飲みながら、心のうちをぶつけ合った2人。

子どもに対する考え方の違いを知ること、逆にお互いを認めることができたという。



それ以来、気兼ねなく何でも言い合えるようになった。

ビオラ：ケンカして、そのままギクシャクしちゃうパターンもあるじゃないですか。でも、理想を言えば、言い合いをしたことで相手の考えもわかり、自分の考えも伝えやすくなる、っていう関係が一番だと思います。

皆さんもビオラさんのように、ケンカ相手と飲みに行けますか？

マリモ：行けな～い(笑)

ビオラ：だから、これ、相手によろと思いますよ。

デメキン：誘ったビオラさん、すごいですね。たぶん、私が同じ状況で、この状況悪いなと思っても、その相手の方に声をかけて近寄ろうっていう感じにはならない。だから、一歩踏み出して相手に近づいて、わかろうって思えるのって、すごくすばらしいと思う。

ビオラ：あの時、今だけを考えてしまえば、「もういいや、離れよう」ってことも、できたと思うんですよ。でも、本当に長い目で見ると、子どもたちは幼稚園時代からの知り合いで、そういう幼稚園時代のことを話せるママもほかにはいないから、貴重な相手なんです。親どうしの仲が悪かったら、子どもにまで影響して、迷惑をかけてしまいそう。かわいそうな思いをさせてしまう気もするんですね。

セントポーリア：私も、考え方がすごく近いなと思いました。子どもどうしの関係をよくするために、親どうしもできるだけ歩み寄りたいたいと思いますし、親どうしもわかり合えるように、自分も寄り添いたいたいなっていう思いでいます。

高山：そこを見失っちゃいけませんよね。

こんなお便りも届いていますよ。

「子どもが友だちグループの中で、軽い仲間外れにされたとき、親どうしで連絡を取り合って話し合いました。イジメに発展するのが怖かったので、みんなで、子どもが悪いことをしたら、わが子ではなくても叱り合おうという、同意書を作りました」

マリモ：同意書？（笑）

ビオラ：同意書（笑）すごいですね。

高山：同意を得たという、コンセンサスを取ったということですかね。今は平和に、仲よく遊んでいますと。

マリモ：よその子ども、態度を変えないってことも大事かな。相手の親がいてもいなくても、「うるさい」とか「静かにして」とか、いつも私はこの子にこういう姿勢ですよっていうのがあると、相手も逆に、だんだんうちの子に注意があればしてくれることもある。



ビオラ：私の聞いた話なんですけども、よその子を注意したママさんがいて、それを子どもが自分の親に報告したらいいんですね。そしたら、そこから嫌がらせが始まったと。親からの、逆恨みですよ。

マリモ：ねー。だから、危険と隣り合わせよー。

ビオラ：そうなんです。どこまでどうしたらいいんだろうって。うーん。

尾木：やっぱり、信頼関係ができていないからそういうことになっちゃうのよね。でも、マリモさんみたいに、おせっかいを焼くお母さん、若ママがね。

高山：お姉さん。

マリモ：気遣いすぎです（笑）

尾木：「マリモさんが言うと、うちの子も素直に言うこと聞いていたみたい。どんな叱り方したのかな？」とか、お互いの学び合いにもなってくるわけ。「やっぱり、マリモさんでもああいう叱り方しちゃうと、うちの子すねて帰ってきたわ」とかね。親どうしの学び合っていく関係が、信頼につながっていくとかね。だから、飲めなくてもいいのよ（笑）

ビオラ：（笑）

高山：お茶でもいいんですね。

尾木：そうなの。相互に理解が深まるような、学び合えるような。お互いが未熟だよっていうのを、前提として置きながら、やっていけるといいかもしれませんね。

高山：ケンカになるとヒステリックになるんじゃなくて、他のご家庭のこととか、教育方針とか、考え方を知るチャンスに出会えるかもくらいの気持ちのほうが、よい気がしますね。

尾木：今、結構、気軽にメールで怒ったり、文句言ったりしちゃうけど、それを怒りのメールじゃなくて、“ほメール”よね。

尾木 : 「あなたのお子さんすてきね」「今日こんなこと、私にやってくれたの」とか、あるいは、「ほかのお友だちにこんなことしていたわよ」とかね。  
“ほメール” なんかだったら、すごくいいと思う。



デメキン : 会ったときに、褒めようと思ってはいても、すぐはできない。

尾木 : だから、メールでね。

デメキン : そうか、怒るんじゃないで…。

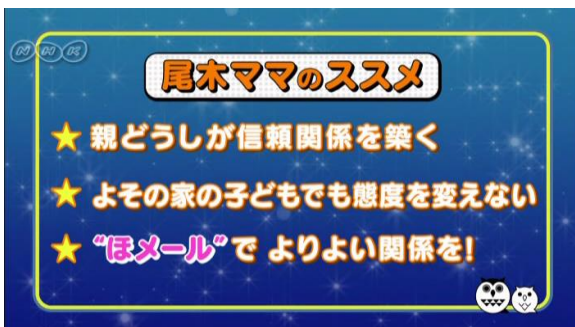
尾木 : メールをいいように使ってほしいと思う。

ピオラ : メールもいいところあるじゃないですか (笑)

尾木 : いいところあるわよ。

### 尾木ママのススメ

子どものケンカにうまく向き合うには、まず、親どうしが信頼関係を築くこと。  
よその家の子どもでも、態度を変えない。そのことで親同士も学びあえる。  
怒りのメールではなく、“ほメール”を送ってよりよい関係を目指そう！



ウワサの保護者会は、これからもさまざまなテーマをお送りします！お楽しみに！  
みんなの知恵が集まるホームページも必見です！

(終)